

踏絵を踏むロドリゴ、あるいは〈知〉の超克 ——遠藤周作の『沈黙』論——

李 英 和

1.

遠藤周作の小説『沈黙』（新潮社、一九六六年、三月）は、切支丹迫害の厳しかった徳川時代に、キリスト教布教の使命に燃えて日本に密航してきたポルトガル人司祭セバスチャン・ロドリゴを主人公とし、彼が実際に日本人に触れ、日本の精神風土の中で活動を行い、最後には、背教するまでの内的葛藤を中心に語られている。

本稿は、小説『沈黙』の主人公ロドリゴが、棄教を迫る役人に対して自身が抵抗するために、かえって日本人信徒たちが拷問を受け処刑されて行くことを知り、踏絵を踏む決意をするというこの小説のクライマックスから結末にかけての考察を行う。クライマックスにおける踏絵を踏むという行為は、カトリックの司祭として、また宣教師として、布教活動の成功や殉教のみを考えていたロドリゴにとって棄教を意味していた。それは、思いもしなかったことであった。

本稿の作品分析の観点は、この作品に散りばめられている〈知〉のレベルにおける神学上の正統・異端を、正面から取りあげることをせず、踏絵を踏むロドリゴの行為を中心に、日本人にとって「キリスト教の神」とは何でなければならぬのかにこの小説の主題を見出し、その主題を追究する。そこから、福音宣教に伴う一七世紀の西欧文化と日本文化との出会いをロドリゴがどう受け止めたのかという、構想へと及ぼしていきたい。

2.

ロドリゴは踏絵を踏まざるを得ないところに追いつめられるまでに、キリスト教禁制下の異教の精神風土の中でさまざまな経験をすることになる。それはまず棄教者キチジローとの出会いと、キリスト教信者たちが拷問され、処刑されて行く場面の目撃、またロドリゴが思い浮かべるキリストの顔の変化と、彼の眼差しから描写される異教の国の自然、さらにフェレイラと役人から聞かされた「日本沼地論」などがあげられる。

ここでは、ロドリゴの内面の葛藤と、作者遠藤周作の〈知〉の超克をたどることにしよう。〈知〉とはいうまでもなく、西欧世界のキリスト教の普遍性を支える〈知〉である。その主題を今この小説のストーリーにたどるならば、それこそがロドリゴが踏絵を踏む行為に集約される。あらためて問うならば、日本人信徒を救うためとはいえ、ロドリゴに踏絵を踏ませる作者の真の意図はどこにあったのか。棄教を強いられるがそれを拒否したロドリゴは、奉行所に連れて行かれ、悪臭のする暗闇の牢に囚われる。その夜一晩中、彼は鼾をかいているような声が聞えて、それに耐えられず、眠れぬ一夜

を過ごす。しかしそれは、穴吊りの拷問にかけられた日本人信徒たちの呻き声であったのだ。それをロドリゴに知らせたフェレイラは、自分が昔経験したことを語る。

「私はあの声を一晚、耳にしなが、もう主を讃えることができなくなった。私が転んだのは、穴に吊られたからでない。三日間……このわしは、汚物をつめこんだ穴の中で逆さになり、しかし一語も神を裏切る言葉をいわなかったぞ（中略）わしが転んだのはな、いいか。聞きなさい。そのあとでここに入れられ耳にしたあの声に、神が何ひとつ、なさらなかったからだ。わしは必死に神に祈ったが、神は何もしなかったからだ」（三〇九—三一〇頁）

フェレイラが弁論するその根拠は、キリスト教を信仰したがゆえに拷問にかけられ、死の苦痛を受けている信徒たちに救いはなく、神は沈黙を守っていたという、その「神の沈黙」にあった。その言葉を聞いたロドリゴは、神に向かって叫ぶが、それは抗議に近いものであった。

主よ、あなたは今こそ沈黙を破るべきだ。もう黙ってはいけぬ。あなたが正であり、善きものであり、愛の存在であることを証明し、あなたが厳としていることを、この地上と人間たちに明示するためにも何かを言わねばいけない。（三一〇頁）

ロドリゴの訴えは、神（キリスト）の正・善・愛、そして厳格な実在性を、この異教の精神風土に向けて与えようという希求である。それは、いまだ神（キリスト）の正・善・愛が、この異教の地にあっても神の恵みであることを前提とする確信に基づいている。それゆえに、神（キリスト）の福音は普遍的なのだという強烈な信仰からの訴えであった。それは、フェレイラの経験を聞かされたロドリゴにとっては、これまで自分も疑うようになっている「神の沈黙」に激しい怒りを感じて、神自らの存在証明を求めているということが読み取れる。存在証明は、異教の地であってこそふさわしい。殉教を覚悟していたロドリゴは、日本の役人から自分が棄教しないと穴吊りの拷問を受ける日本人信徒たちを救うことが出来ないといわれて、棄教の選択を迫られていた。そのうえに、フェレイラからも棄教をすすめられる。

「たしかに基督は、彼等のために、転んだだろう（中略）基督は、人々のために、たしかに転んだだろう（中略）基督は転んだだろう。愛のために。自分のすべてを犠牲にしても」（三一〇—三一〇頁）

「お前は今まで誰もしなかった最も大きな愛の行為をやるのだから……」ふたたびフェレイラは先程と同じ言葉を司祭の耳もとに甘く囁いた。「教会の聖職者たちはお前を裁くだろう。わしを裁いたようにお前は彼等から追われるだろう。だが教会よりも、布教よりも、もっと大きなものがある。お前が今やろうとするのは……」（三一〇—三一〇頁）

このフェレイラの言葉が意味するものは何か。「愛」の普遍のありようへの深い確信であった。ロドリゴが置かれている状況は、キリスト教の抹殺、キリスト教徒の国外追放をめざす異教の権力に対して、もし、たとえキリスト教が抹殺・排除されたとしてもキリスト教の本質が「愛」の中にあるとすれば、「転(ぶ)」こと、すなわち棄教も日本人信徒の命を救うという「大きな愛の行為」の実践ではないか。キリスト教の「命」と信徒の「命」、この二者択一を迫られたとき、「愛」はどちらを選ぶか。フェレイラの棄教のすすめは、「愛」の普遍性を訴えるところにあった。

踏絵の前に立ったロドリゴは、踏絵に刻まれている「細い腕をひろげ、茨の冠をかぶった基督のみにくい顔」を日本に来てはじめて接する。か弱くて醜悪な神の御姿を見出したとき、ロドリゴは踏絵を踏もうと決意するのであった。それは西欧キリスト教の神の崇高性・尊厳性から神自身が逸脱する姿でもある。フェレイラのすすめにロドリゴが心を動かされたとすれば、それにはこれまでもどうか口を開いてくださいと訴え続けてきた「神の沈黙」があった。フェレイラもそのことに深い懐疑を抱いて棄教した。ロドリゴは異教の国の日本へ来て始めて、西欧キリスト教の普遍性がその言葉の意味においてそうでないことに気づいたということである。ロドリゴには、フェレイラから棄教をすすめる言葉を聞く前から、西欧キリスト教の普遍性に対する〈知〉の葛藤が起こりつつあったとみてよい。

『沈黙』の中で「踏んでもいい」という言葉は、三箇所出てくる。モキチとイチゾウが取調べを受けるために役所へ行く時、ロドリゴは彼等に「踏んでもいい」といい、またガルペが三人の日本人信徒と死んでいく場面を見たとき、ガルペに向かって「転んでいい。いいや、転んでならぬ」と叫ぶ場面である。そして三度目、ロドリゴの言葉としてではなく、キリストが「神の沈黙」を破って自分に語りかける声を聞く。「踏むがいい」という、その声を聞いて、やがてロドリゴは踏絵を踏んだのであった。

司祭は足をあげた。足に鈍い重い痛みを感じた。それは形だけのことではなかった。自分は今、自分の生涯の中で最も美しいと思ってきたもの、最も聖らかと信じたもの、最も人間の理想と夢にみだされたものを踏む。この足の痛み。その時、踏むがいいと銅版のあの人は司祭にむかって言った。踏むがいい。お前の足の痛さをこの私が一番よく知っている。踏むがいい。私はお前たちに踏まれるため、この世に生れ、お前たちの痛さを分つため十字架を背負ったのだ。

こうして司祭が踏み絵に足をかけた時、朝が来た。鶏が遠くで鳴いた。(三一二頁)

先行研究では、この踏絵を踏む場面をめぐる、「キリストに倣うために、〈愛の行為〉をするために、形だけ踏もうと足をあげた。これは棄教でも背教でもない」⁽¹⁾とか、「ロドリゴは自分が闘ってきたのは迫害に対してではなく、自分自身の信仰に対してだったと認識できる」⁽²⁾とか、「ロドリゴが踏絵を踏んではいけない」と、まず彼の行為を非難したうえで、踏絵行為は「近親相姦」である⁽³⁾といった指摘があった。いずれも護教論の立場からの批評といえよう。江藤淳は、『沈黙』の踏絵の場面を取り上げ、踏絵の行為によって「父」を抹殺し、「母」との合体をとげた⁽⁴⁾といい、「そのとき彼をつらぬいた燃えるような恍惚と痛みとは、ついに母子相姦の願望をとげた者のひそか

な、しかし激しい歓喜にほかならない。これ以外に彼にとっての救済はなかった」⁽⁴⁾と評している。しかし、本稿で、キリストの顔の変化は母性性の顕現ではなく、西欧キリスト教からの逸脱の表象と認める以上、ロドリゴの踏絵を踏む行為を江藤淳とは違う視座、すなわち再生、あるいは新生を試みる行為として捉えたい。

ユングは『自伝』の中で、次のように述べている。

私にとっては、近親相姦はきわめて稀な事例においてのみ、個人的な悶着の種を意味していた。通常、近親相姦は高度に宗教的な側面を有しており、そのために近親相姦の主題は、ほとんどすべての宇宙進化論や多数の神話の中で決定的な役割を演じているのである。しかるに、フロイトはその字義どおりの解釈に執着し、象徴としての近親相姦の霊的な意義を把握することができなかった⁽⁵⁾。

このように、近親相姦に霊的な意義を認めるユングと同様、河合隼雄⁽⁶⁾もまた次の見解を述べている。

近親相姦タブーを破ることは人間の意識構造のみでなく、その全存在にかかわるおそれをひき起こすのであり、人間の意識のみではなく全存在をゆすぶる体験、霊的な体験である。(中略)自分の全存在をかけて自然の法に挑戦することによってこそ、人間は霊的な体験をなし得る。母との合一は原初の状態への回帰を意味し、原初への回帰はおのれの存在をより根源的なものへと合一せしめることを意味する。

ユングと河合の見解からすれば、ロドリゴは自分が今まで全存在をかけて信じてきたものに挑戦したからこそ、新たな霊的な体験を成し遂げたということになる。河合隼雄は、人間が神々に敢えて挑戦しようとするとき、それは近親相姦タブーの意識的な破壊でなければならない。母との合一を体験しつつ、なおその中から再生し得るとき、それは限りない創造的な過程となる⁽⁷⁾、といている。ロドリゴの踏絵行為こそ、「近親相姦タブーの意識的な破壊」といえよう。ロドリゴにおいて神への挑戦とは、西欧の〈知〉を中心とした「父性」の神に対してであった。それはまた西欧キリスト教からの逸脱だとすれば、キリストの顔の変化とも照応していよう。ロドリゴは、禁止された近親相姦のタブーを自ら破壊することによって、神のみならず、自らの再生を試みたと考えられる。その再生とは、異教の国で新しく獲得する〈知〉であることはいまでもない。つまりロドリゴの踏絵行為は、新しい〈知〉を獲得するプロセスであったといえよう。そうすると、ロドリゴの踏絵を踏む行為をめぐる江藤淳の指摘は、近親相姦の象徴性に愛の宗教的意味は認識しえていたとしても、それが神とロドリゴの再生、あるいは新生へとつながることまでは理解していなかったと考える。

さて、ロドリゴが踏絵に足を上げることを決意するようになったきっかけは、何と言っても、ロドリゴに「神の沈黙」が破られて神の声がそう命じたからである。しかし神の声を聞いたふしが、どう

しても読み取れない。それがこのロドリゴの試練の極限において、神の声がそう命じたのだ。「踏むがいい。私はお前たちに踏まれるため、この世に生れ、お前たちの痛さを分つため十字架を背負ったのだ」。ロドリゴはそれにうながされて踏絵を踏んだ。

ふり返ってみよう。ロドリゴはフェレイラと出会い、彼から「日本沼地論」を聞かされ、その後また「切支丹が亡びたのはな、お前が考えるような禁制のせいでも、迫害のせいでもない。この国にはな、どうしても基督教を受けつけぬ何かがあったのだ」という言葉を聞かされる。フェレイラの話によると、日本人あるいは日本の精神風土が、キリスト教の受容を拒否しているのは、たんに日本国内の状況によるだけではないということだ。フェレイラの実験知からすると、「基督教を受けつけぬ何か」があるということだった。しかしその言葉は、フェレイラが「神の沈黙」に直面してみずから思索した結論にすぎない。

それは、西欧キリスト教の普遍が、異教の国ではまったく通用していないことを意味する。言い換えれば、フェレイラ言葉は、西欧キリスト教の普遍の視点にこだわる形で、日本の精神風土や文化・生活それ自体を特殊化・個別化することであった。いわば、人間の〈知〉による差異化にほかならない。それによって、自己の行為を正当化する弁明だったともいえる。フェレイラ言葉を聞かされる前から、西欧キリスト教の普遍の偏狭さに気づいていたロドリゴは、沼地の中での普遍とは何でなければならぬのかを考え、苦悩し続けていた。

こうして、やがてロドリゴは踏絵を踏むことになるが、その最後の意志と行為は、ロドリゴにおいて自分の内面の〈知〉の葛藤を終えた後、新しい〈知〉を獲得するための闘争であったといえよう。それを裏付けるものとして、踏絵を踏んだ後のロドリゴの心情をみるがよい。

私は聖職者たちが教会で教えている神と私の主は別なものだと知っている。（三一五頁）

自分が闘ったのは筑後守を中心とする日本人ではなかった。自分が闘ったのは自分自身の信仰にたいしてだったと次第にわかってきたのだ。（三二一頁）

上記の二つの引用で気づくのは、ロドリゴには、踏絵を踏む前から内面に大きな葛藤があったということである。それはいわば、西欧のキリスト教そのものとの葛藤であると思うが、ロドリゴはそれと戦ったのだ。

棄教の証明として踏絵を踏んだロドリゴは、奉行所から家を与えられ、長崎の外浦町に住むことになる。彼は監視され、許可なく自由に外出することはできなかった。彼は時々奉行所に呼ばれ、切支丹の品物か否かを鑑別する仕事をしている。『沈黙』に挿入されている「長崎出島オランダ商館員ヨナセンの日記より」の中には、一市民の家で発見された聖母像や聖徒の像を彫ったペニング貨などの鑑別に、パードレ沢野忠庵とポルトガルのパードレ・ロドリゴが立ちあつたと記されている。

ロドリゴはある日、奉行所から呼び出され、筑後守に会わせられる。ロドリゴが転んでから始めて会った筑後守は、彼に江戸に移ることを命じ、「岡田三右衛門」という日本人の名と死んだ男の女房を

与える。

ある日、ロドリゴのところにキチジローが告解を求めにくるが、ロドリゴは、「もうパードレではない」と拒否する。その時、ロドリゴは、自分が踏絵を踏んだ時を振り返ってみるのであった。

「主よ。あなたがいつも沈黙してられるのを恨んでいました」

「私は沈黙していたのではない。一緒に苦しんでいたのに」

「しかし、あなたはユダに去れとおっしゃった。去って、なすことをなせと言われた。ユダはどるなるのですか」

「私はそう言わなかった。今、お前に踏絵を踏むがいいと言っているようにユダにもなすがいいと言ったのだ。お前の足が痛むようにユダの心も痛んだのだから」 (三二五頁)

ロドリゴは右に引用した自問自答というべき問答が終わってから、踏絵を踏んだ。ロドリゴは、「この烈しい悦びと感情とをキチジローに説明することはできなかつた」。しかし、ロドリゴが踏絵を踏んだ時は、右の問答が見当らない。キチジローが告解にきた時、改めて想起したのである。ここで注目すべきことは、ロドリゴの「烈しい悦びと感情」である。ストーリーを戻して考えよう。ロドリゴは、神学生の時から、キリストがユダに言った「去れ、行きて汝のなすことをなせ」という言葉の意味がわからなかつた。

この言葉こそ、昔から聖書を読むたびに彼の心に納得できぬものとして引っかかっていた。この言葉だけではなくあの人の人生におけるユダの役割というものが、彼には本当のところよくわからなかつた。なぜあの人は自分をやがては裏切る男を弟子のうちに加えられていたのだろうか。ユダの本意を知り尽くして、どうして長い間知らぬ顔をされていたのか。まるでそれではユダはあの人の十字架のための操り人形のようなものではないか。(中略) もしあの人が愛そのものならば、何故、ユダを最後は突き放されたのだろうか。(三〇七頁)

ロドリゴは、神学生の時から問い続けたユダの裏切りと救いに関する問いを、キチジローに裏切られ、牢に入れられてから何度も繰り返し、かみしめるように考えた。やがて、ロドリゴは、自分も踏絵を踏んだが、キチジローはそれにかまわず、自分に告解を求めに来た。このように、自分が踏絵を踏んだ時を想起したロドリゴは、告解を求めにきたキチジローに、「強い者も弱い者もないのだ。強い者より弱い者が苦しまなかつたと誰が断言できよう」といい、「安心して行きなさい」という言葉を告げるのであつた。キチジローに「安心して行きなさい」という許しの言葉を告げることができたのは、ロドリゴ自ら「烈しい悦びと感情」を味わつたからであると考えられる。言い換えれば、ロドリゴがずっと問い続けてきた問いであつた、ユダの裏切りと救いに関する疑問が解けたからだといえよう。その後、ロドリゴは自分の心境を次のようにいう。

私はその愛を知るためには、今日までのすべてが必要だったのだ。私はこの国で今でも最後の切支丹司祭なのだ。そしてあの人は沈黙していたのではなかった。たとえあの人は沈黙していたとしても、私の今日までの人生があの人について語っていた。(三二五頁)

『沈黙』の最後のところであるが、確かにこの言葉には、新しい〈知〉を獲得したロドリゴの確信に満ちた様子が読み取れる。ロドリゴは、異教の国の日本に来てから沈黙していた神に疑問を抱き、また怒りをあらわにしていた。ところが、踏絵を踏んでからは、今まで疑問に思っていた神の沈黙が沈黙ではなかったことに気づく。それは「その愛」を知ったからであった。言い換えれば、ロドリゴは沈黙していた神に怒りを覚えていたが、その神は「教会で教えている神」であった。しかし、踏絵を踏んでからは、「あの人」のことを知ることができた。それは、「その愛」を知ることでもあった。「あの人」とは「教会で教えている神」ではなく、ロドリゴが新しく獲得した「私の主」であるのはいうまでもない。

ところで、ロドリゴのいう「その愛」とは、何であろうか。また「その愛を知るためには、今日までのすべてが必要」であったとは何を意味するものなのか。ロドリゴが今まで知っていた〈愛〉と、新しく獲得した「その愛」の違いは何であるか。これらの疑問への答えは、まず日本へ向かうときのロドリゴの意識を想起してみればよい。

繰り返しになるが、フェレイラの棄教を知らされてロドリゴ一行が日本へ潜入を決心したのは、フェレイラの棄教を「たんなる一個人の挫折ではなく、西欧全体の信仰と思想の屈辱的な敗北」であるとみたからだ。この言葉には、まさに帝国主義的で植民主義的な優越感が潜んでいたといえる。いわばフェレイラの棄教は、彼等西欧人の自尊心を傷付けることであった。このような優越感に満ちたロドリゴの意識は、日本に着いても変わらない。弱者であり裏切者であるキチジローに向けるロドリゴの眼差しは厳しい。キチジローは、異教の国、禁教の国でキリスト教信者になろうとしていたが、拷問と死刑に処される恐れから棄教を繰り返す。それゆえ、ロドリゴは彼に始終軽蔑の視線を向けていた。しかし、ロドリゴのキチジローに向ける眼差しは段々と変わり、告解を求めにきた彼に「安心して行きなさい」という言葉を告げることができた。いわば、ロドリゴのキチジローに向ける眼差しの転換といえよう。つまり、ロドリゴの眼差しに、それまで働いていた優越感がなくなり、異教の国における棄教者の境遇を理解して、裁く人から理解する人へと転換したのであった。ロドリゴの殉教者に向ける眼差しと、ロドリゴ自身の〈知〉の変化も読み取ることができる。殉教者たちは、異教の国で禁制されたキリスト教を信ずるがゆえに、いつも恐怖にさらされていた。彼等は密告されると棄教の代りに拷問を受け死を選ぶことで、キリスト教の教会側から殉教者と讃えられた。異教の国で拷問を受け処刑されていったこれらの殉教者たちを、ロドリゴは幾度か目撃するが、その度ごとに、ロドリゴは殉教ということに疑念を抱く。彼等が棄教せず死を選んだのは、異教の国へキリスト教を伝えた宣教師たちが、彼らに殉教の徳を讃えたからにちがいない。その当時、キリスト教を伝道した宣教師たちの神概念は、〈裁きの神・罰する神〉であって、彼等は信者たちを殉教への道へ駆り立てた。ロドリゴは、彼等が処刑されるたびに、〈神の沈黙〉に深い疑念を抱き、その疑念は殉教そのものの偏狭さを

見抜いて行くことになる。言い換えれば、ロドリゴは今まで全存在をかけてキリスト教の普遍性を信じてきたが、西欧キリスト教の普遍性が、異教の国では普遍性そのものとして通用してはいけないということに気付いたといえよう。このように、ロドリゴにおいて、異教の国で棄教者キチジローと殉教者との出会いは、新しい〈知〉の獲得のためには欠かせないことであった。その新しい〈知〉の獲得を可能にしたのは、政治権力ないし宗教権力の犠牲となった人々、つまり棄教者と殉教者を凝視するロドリゴの眼差しがなければできないことであった。カトリック教会の一人の司祭にすぎないロドリゴは、キリスト教の布教に伴って、西欧キリスト教の普遍が、いかに異教の国においては暴力であったかを自分の眼差しを通して物語ったのである。そこには、教会が、宣教におけるさまざまな過ちを自分のものにすることを期待する遠藤の思いがあったと思われるが、まさにロドリゴの踏絵を踏んだその行為にこそ、「加害の視点」を自分のものにしようとするロドリゴの意志が働いていた。さらに、文明なるものは、単数ではなく複数であるというロドリゴの歴史認識があったからであったと考えられる。

3.

ロドリゴは、西欧キリスト教の普遍が、異教の国においては普遍として通用しないことを日本人の棄教者と殉教者と接することで理解した。ロドリゴの踏絵を踏む行為は、当時ローマ・カトリック教会側からみれば、まさに異端の行為であった。一人の司祭に過ぎないロドリゴが、ローマ・カトリックの教義を揺さぶる行為がどうして可能であったのだろうか。

『沈黙』において、フェレイラの棄教の知らせを聞いて、最初ローマにいる司祭がその真相を究明するために旅立つ動きを語る一方、なぜポルトガルのイエズス会に属する三人の司祭たちを中心に物語が展開されているのか。その点を考えてみたい。ここで見逃せないのは、ロドリゴが属していた修道会である。

周知のように、日本へ始めてキリスト教を伝播したのは、フランシスコ・ザビエルである。イエズス会は、イグナチオ・デ・ロヨラとパリ大学の学友だった六名が一五三四年創立し、一五四〇年に教皇から公許された。ザビエルは、イエズス会を代表する人物の一人であった。ロヨラがイエズス会を創立した頃は、大航海運動、ルネサンス、宗教改革によって近代を迎えた時代で、ヨーロッパのキリスト教世界は、刷新の希望に燃えていた⁽⁸⁾。いわば、イエズス会は、カトリック教会の対抗改革⁽⁹⁾の始まる時に創立されたのだ。カトリック教会による対抗宗教改革は、「カトリシズムの近代的再興」であった。これは、宗教改革によって失ったカトリックの勢力圏を奪回し、同時に新たな布教地の開拓と獲得を意味していた⁽¹⁰⁾。このような時代の動きの中で創設されたイエズス会は、全世界への宣教の意志を明らかにしている。『沈黙』のロドリゴは、このイエズス会に属していた。ザビエルが日本へキリスト教を伝播したときは、イエズス会創設から十年にも満たなかった。当時日本は、「聖フランシスコ・ザビエル以来、東洋でもっとも良き種のまかれた日本国」であったが、その後間もなく、キリスト教の迫害が始まる。その状況は、『沈黙』の中にも書かれている。

ロドリゴ一行が彼らの師フェレイラが棄教した真相を探り、その上で日本での布教を志して日本へ向かって出発したのは一六三八年頃であった。キリスト教禁止令が發布された後、幕府の迫害は苛酷になり、キリスト教徒は拷問によって棄教させられ、あるいは処刑された。まさにその時期にあたる。しかし、このような迫害にも関わらず、宣教師たちが伝えるキリスト教は受容されるべき宗教としてあり続けた。日本ではじめてキリスト教の布教を主として担当したのは、イエズス会であった。ところが、一五九三年フランシスコ会をはじめ、その後ドミニコ会そしてアウグスティノ会の宣教師たちも彼らなりに福音を宣布した⁽¹¹⁾。

さて、ここでロドリゴが、イエズス会の一員であったことに注目したい。勿論、作家が、フェレイラとロドリゴを歴史上存在した人物をモデルにする⁽¹²⁾など、史実に基づいてストーリーを展開させたからといえればそれまでであるが、なぜロドリゴをそのまま、イエズス会に属する司祭にしたのかは疑問である。前述したように、ロドリゴが日本へ潜入した時は、一六三八年頃であって、その時はイエズス会だけではなく他の修道院の宣教師たちも活動していたはずであった。しかし、修道会が創設された時期を考えると、フランシスコ会は一二〇九年、ドミニコ会は一二一六年といずれも中世に創設されている。ところが、先述したように、イエズス会は、プロテスタント教会による「宗教改革」に対する、カトリック教会側からの「対抗宗教改革」の直前に創設された。

その当時、カトリック以外の宗教は、すべて邪教として取り扱われてきた。こうしたことから考えられるのは、一六世紀カトリックの内部改革が行われたとき創設されたイエズス会によせる作者の願いと期待、あるいは日本に始めてキリスト教を伝えたイエズス会に寄せた作者の思いが働いていたのではないかということだ。もちろん、当時、イエズス会の本部は、日本宣教をめぐって、日本でキリスト教徒迫害があった場合、宣教師や信者たちが殉教に駆られる危険な状態に陥ることを心配していた⁽¹³⁾。しかし、一六世紀の対抗宗教改革として創設されたイエズス会は、世界布教を目指したものの、それは西欧を軸としたキリスト教であった。いわば、受容されるべきキリスト教であった。

ロドリゴは日本へ来て、日本人の棄教者と殉教者、また日本の政治状況や自然と接するうちに、普遍と特殊は決して矛盾するものではないことがわかった。国家あるいは文化の多様性によって、ある規範は普遍的であり、ある規範は文化的で特殊である。異なった伝統、異なった宗教、また異なった政治状況に出会った際、どの規範、どの価値が普遍的に支持できるかを究明するのは難しい。他の文化の規範に判断を下すことは簡単ではないのである。それゆえ、ロドリゴはカトリック教会が、西欧的論理をもって布教するということが、いかに救済の理解に他者性、多様性の余地を失わせることであったかを感知したということになる。それを可能にしたのは、物語外部の時間で行われた、カトリック教会側の注目すべき出来事である第二バチカン公会議であった。

キリスト教は、一六世紀の大航海時代以来、西欧社会のあり方を唯一の基準として西欧のキリスト教を押し付けるようにして宣教してきた。第二バチカン公会議は、このように欧州を中心としたキリスト教が、世界に開かれた教会へと推移していく、そのきっかけとなるものであった。ここで注目すべきことは、こうした流れと並行して、教会における「インカルチュレーション」の必要性が求められるようになっていったということである。

さて、ロドリゴがイエズス会の宣教師として設定されていたこと、『沈黙』の外部時間で行われた第二バチカン公会議、この二つに関連するものは何であるのだろうか。『沈黙』の中では、ロドリゴがイエズス会の宣教師であることは明らかにされている。しかし、当然ながら、物語の時間設定が一七世紀になっているので、約三百年後に行われた第二バチカン公会議が言及されるはずがない。しかしながら、『沈黙』には、この二つをつなげる接点がある。それこそロドリゴの踏絵を踏む行為であったと考える。

遠藤がロドリゴに踏絵を踏ませたのは、「インカルチュレーション」によせた遠藤の思いがそこにあったと考えられる。つまり、遠藤はイエズス会がカトリック教会側からの「対抗宗教改革」として創設されたからには、イエズス会の宣教方針はキリスト教の「インカルチュレーション」を志向するべきであったということ、ロドリゴに踏絵を踏ませる行為をもって主張しているのだ。それは、イエズス会によって世界宣教が始まり、またその修道会によって日本に始めてキリスト教が伝えられたからであろう。遠藤は、物語外部時間で、ロドリゴに踏絵を踏ませることによって、すでに日本におけるキリスト教の「インカルチュレーション」を提案したのであった。

本稿に引用した遠藤周作の小説は『遠藤周作文学全集』（全一五巻、新潮社、一九九九年—二〇〇〇年）に拠ったもので、ルビはすべて削除した。

【注】

- (1) 笠井秋生『遠藤周作』双文社出版、一九八七年、一六一頁。
- (2) 山崎一穎「遠藤周作・その作品世界、沈黙」『国文学解釈と鑑賞』至文堂、一九七五年、一五一頁。
- (3) 江藤淳「成熟と喪失——母の崩壊」『江藤淳文学集4』河出書房新社、一九八五年、四一七頁。
- (4) 江藤淳、前掲書。
- (5) 河合隼雄「象徴としての近親相姦」『現代思想』臨時増刊号、第六巻第六号、一九七八年、五月、四三頁、再引用。
- (6) 河合隼雄、前掲書、四〇—四四五頁。
- (7) 河合隼雄、前掲書、四四頁。
- (8) フィリップ・レクリヴァン『イエズス会——世界宣教の旅』垂水洋子訳、創元社、一九九六年、一八頁。
- (9) カトリック教会の組織を建て直してプロテスタントの教勢拡大を食い止めようとした運動。
- (10) 高橋裕史『イエズス会の世界戦略』講談社、二〇〇六年、四五頁。
- (11) 高橋裕史、前掲書、二八〇頁。
- (12) 実際イエズス会管区長フェレイラは拷問によって棄教させられ、通訳として幕府の棄教政策に協力し、ロドリゴは歴史上存在した司祭ジュゼッペ・キャラをモデルにしたとされる。
- (13) レンゾ・デ・ルカ「日本的な教会を目指したヴァリニャーノ——日本における十六世紀の宣教思想」『カトリック研究』第六八号、上智大学神学会、一九九九年、一〇頁。

Rodorigo trampling down Humie or Knowledge's conquest —the theory of the 〈Silence〉 by Endo

Lee younghwa

Abstract

This paper is focused on the latter parts of the novel <Silence> - from the climax through the conclusion - in which the main character Rodorigo made up his mind to trample Humie for himself on the occasion of the sufferings of the Japanese believers tortured and executed.

Treading down Humie was nothing less than apostasy which had never been imagined by Rodorigo as a priest and a missionary who were absorbed in only the success of the missionary work and martyrdom.

Rodorigo had known that what is universal in the western society is not the same as it is in the Japanese society as he met both the apostates and martyrs. It was real heretical that Rodorigo trample Humie from the viewpoint of the Catholic church at that time. What made it possible for a mere catholic priest to do such a thing to overturn the catholic basic tenets.

Aside from the fact whether it is orthodox or paradox, what catholic god should be to the Japanese people centering Rodorigo who trample the Humie is the main topic of this thesis. How Rodorigo accepted the intercourse of the western and Japanese culture as a result of missionary work in the 17th century would be discussed at the same time.

